

江戸の妖怪と都市空間

内田 忠賢

1 問題設定

18～19世紀における東アジアの大都市、江戸では、妖怪文化が花開いた。当時の妖怪文化には、絵画、小説、噂話の3種類があった。江戸の人々は恐怖しながらも、それらを楽しんでいた。まず、絵画における妖怪文化である。国芳らの妖怪画が流行していた。次に、小説における怪異文化である。これは2つに分類できる。『雨月物語』を代表作とする上田秋成らの幻想文学である。物語構成の複雑さや典拠の豊富さで、当時の文化人に好まれた。その一方、庶民の間では、ストーリーが簡単で、しかも短編の怪異小説が流布した。文字が読めない庶民が多かったため、語りもののテキストとして使われたらしい。これら絵画と小説は、空想世界（フィクション）としての怪異文化である。三つには、現実世界（ノンフィクション）としての怪談文化があった。実際、江戸市中では、妖怪たちが出没し、人々はその噂を楽しんだ。いわゆる、怪談である。今回の報告では、3番目の妖怪文化、庶民が現実世界で受け入れた怪談を材料とする。

江戸の庶民が身近に体験し、感じとった怪談については、文学研究ではなく、民俗研究の分野で扱われた。古くは、日本民俗学の祖、柳田国男、少し前には、故・宮田登らが、研究した。しかし、伝統的な民俗研究は、時代や地域を限定して、考察しないため、実証性に欠ける。時代を18～19世紀の江戸時代後半、地域を大都市、江戸に限って考えると、これまで指摘されなかった事実が、次々と浮かび上がった。私は地理学を専門するため、妖怪と場所の関わりに関心を持つ。柳田や宮田は「幽霊は人に憑き、妖怪は場所に憑く」と指摘する一方、「妖怪が出現する場所は、橋や渡し場、辻や峠である」と断定した。ところが、当時の江戸で流布した膨大な妖怪出現の記録を読み直すと、橋や辻に現れる妖怪は、ほとんどいない。彼らの指摘は、多種多様な民間伝承をデータソースにするため、一般論になっている。研究上の手続きが足りない。

なお、当時の江戸は百万人以上が暮らしていた。庶民（町人）や武士が全国から集まっていた。また、首都という特殊性のため、江戸への人々の出入りは難しかった。極端に言えば、閉じた小宇宙だった。

2 武家屋敷の怪異

たとえば、次のような噂話がある。実話である。「屋敷の庭に狐が棲んでいた。ある時、主人が庭を見ると、

飼い犬が狂ったように走り回っている。向こうの築山の上に狐が一匹いた。狐があごを右に向けると、犬は右に走り、あごを左に向けると、犬も左に走る。そのうち、犬は疲れ果て、倒れてしまった。狐は悠然と、犬の食べ物を奪ってしまった」（鈴木桃野筆録『復古のうらがき』）

当時の江戸式庭園、庭に広い面積を割り、森や林が敷地内にある庭園での事件である。狐が霊的な力を発揮した場所が、築山である。また、こんな実話も記録される。

「屋敷で、出入りのお茶の先生が、一匹の狐にいたずらをしたことがあった。ある日、家臣たちが庭の掃除をしていると、狐が築山のあたりで、突然、その先生の姿に化けた。彼らが「あの先生は、狐の妖怪だ」と追い回した。そこへ、本物の先生がやって来て、皆から殴られた」（根岸鎮衛筆録『耳袋』）

「持ち主が次々と逃げ出す屋敷があった。夜中に、新しい主人の前に、突然、老婆が現れた。老婆の様子が不審なので、刀で切り付けると、彼女は消えた。翌朝、血をたどると、庭の森の奥で狸が死んでいた」（『耳袋』）

同様の噂話は数多くある。場所は大名屋敷を代表とする広大な武家屋敷、狐が妖怪になるのは、庭の築山や森である。民間伝承で、妖怪と言えば、座敷童子（子供の妖怪）や河童（川や池に棲む妖怪）が日本では有名だが、そのような妖怪は江戸では現れない。狐や狸が人間に化け、あるいは狐が霊力を発揮する場合が多い。同時代の有名作家、滝沢馬琴も「世に化物と伝えられるのは、狐狸だけである」（『兎園小説』）と断言している。また、当時の大都市、江戸は、次々と開発され、自然を残す場所は、屋敷地の庭や森だけになっていった。そこに棲む動物は、狐や狸であった。彼らは、妖怪のイメージを与えられていた。特に、狐は神様の使いとも言われ、不思議な力があると信じられていた。

3 妖怪が現れる都市空間

当時の大都市、江戸に流布していた噂話は、同時代の随筆や世間話集で読むことができる。私は、いくつかの歴史資料を整理して、妖怪出現の場所を考察した。

まず、空間のカテゴリーを屋敷地というスケールで、2つに分類できる。家屋内部の特定の空間で、妖怪現象が起こることが分かった。納戸、座敷、厠などである。これは、柳田らが指摘した空間と同じである。興味深いのは、家屋外での妖怪現象が現れる場所である。先に述べたように、大名屋敷など武家屋敷の庭、特に築山で数多く起こっている。

さらに興味深いのは、江戸という都市空間全体での、妖怪現象が現れる場所である。歴史資料ごとに、「江戸の妖怪

地図」を作成してみた。たとえば、首都の治安を守る責任者、町奉行、根岸鎮衛が記録した『耳袋』が、質・量ともに最適なデータソースだった。『耳袋』には、噂話、特に、江戸で起こった奇妙な話、不思議な話が記録される。妖怪現象のカテゴリーは、「霊験」、「馮きもの」、「動物などの怪」に分類できた。「霊験」とは、日頃、神仏を大切にしているため、奇跡が起こることである。「馮きもの」とは、人間に突然、狐や猫が乗り移ることである。「動物などの怪」は、先に具体例を出した。その結果、「霊験」は主要寺院、特に浅草寺周辺に集中する。「馮きもの」は、下町の人口密集地域で起こる。「動物などの怪」は、大名屋敷など大規模な武家屋敷が集まる山手付近に集中する。しかも、台地（武蔵野台地）上ではなく、台地と低地の境、地形学的には台地端（だいちたん）で怪異現象が起こる。なぜなら、台地端は、もっとも森が残りやすい場所であり、屋敷地の庭として利用される場所である。

4 妖怪を予感させる場所

次のような不思議な話がある。

「ある青年が、20時頃、神楽坂を下るにつれて、何も起こらないのに、妖怪が現れる予感がした。坂道を下ると、無数の提灯の妖怪が青年めがけて押しかけてきた。しかし、よく見ると、妖怪ではなく、単なる勘違いだった」（『反古のうらがき』）

この噂話は、妖怪が出そうで出なかったという面白い事例である。当時の神楽坂には、奇妙な気分させる客観的条件がそろっていた。同時代の空間情報データ（『御府内往還其外沿革図書』『御府内備考』など）と照合すると、神楽坂は高い堀と森に挟まれ、下るにつれて道幅が狭くなる坂道であった。青年は一人で、暗やみの中、人通りのない、このような坂道を歩いていた。付近では、妖怪が出たという噂も多い。青年が「そぞろに恐ろしく覚え」たのも無理はない。当時の江戸には、このような場所があった。

5 日本文化と妖怪論

この報告では、地理学的な視点から、江戸という都市空間と、人々の想像力の産物である妖怪の関係について、ご紹介した。人々は、妖怪を恐れながらも、親しみを感じ、楽しんでいる。江戸市中のある場所で、「妖怪が出た」という噂を聞き付け、面白い見世物だと、嬉しそうに人々が集まってきたという記録もある。西洋の悪魔とは、ずいぶん異なる。話は飛ぶが、天神信仰というものが、日本にある。恨みを持って死んだ人物が、妖怪となって天災を起こしたが、その人物を神（天神）として祀（まつ）ることで、妖怪は人々に幸福をもたらすという考え方である。妖怪と空

間論、妖怪と文化論、興味深いテーマは尽きない。

文献

柳田国男(1963)「妖怪談義」『定本柳田国男集4』筑摩書房（東京）

Tuan, Yi-Fu(1980)Landscape of Fear, Basil Blackwell

宮田 登(1985)『妖怪の民俗学』岩波書店

内田忠賢(1990)「江戸人の不思議の場所」史林 73-6

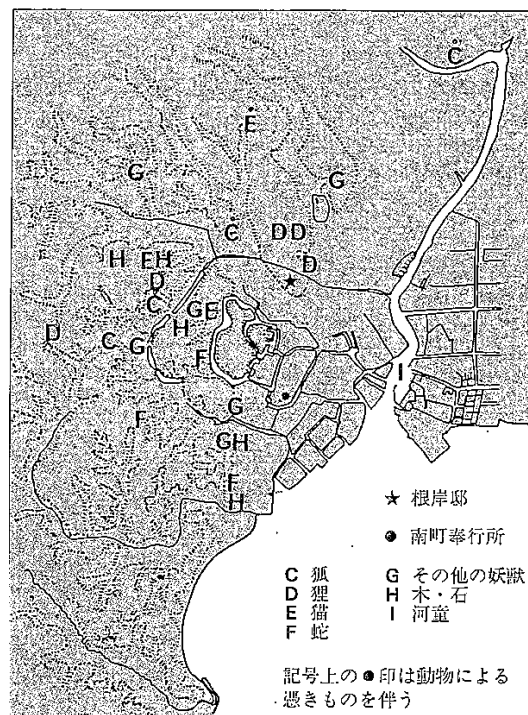
内田忠賢(1994)「不思議な空間 空間の不思議」思想の科学 515

内田忠賢(2000)「そぞろにおそろしく覚えて」『記憶する民俗社会』人文書院

内田忠賢(2000)「神楽坂の怪異」『地図と歴史空間』大明堂

江戸の妖怪マップ

(動物の妖怪が出た場所、『耳袋』により内田作成)



(『歴博』106号、2001年)